

趣味以上 仕事未満

金子勝之さん（昭和27年生 柳津町）

“60の手習い”で何か始めようと考えた。

やり慣れた好きなことでは脳は使われない。最も苦手なことの方が、脳は活性化される。

カメラに収めることは慣れていたが、その中の一部を自分の手で描き出す絵は、昔から抵抗感があった。

そんな迷いに揉まれているうちに、偶発的な、実は運命的な出逢いから、絵手紙を描くことになった。

隠しながら描いているのを、先輩のお母さんたちに取り上げられてゲラゲラ笑われた。

恥ずかしさの反面、意外な気づきがあった。

「絵が下手なことでは笑われることくらい、今までの失敗と比べたら何らたいしたことでもない」。

絵手紙の練習はしない、知識もない、経験もない。

“今の”自分の描いた絵で、人が笑ってくれて、喜んでくれたりする。

「上手くならなくて、いいのだ」。



何をやってもいい加減で、中途半端な自分に情けなくなった若い頃、家族を支え子供を育てる責任感で決めた写真屋の仕事、60歳で写真屋を閉じてから、やりたいことにどんどん挑戦してきた現在まで、その過程ではたくさんの人と奥会津の環境に助けられた。

その蓄積から出てくる言葉を、ただただ思いのままに絵手紙に託す。

ご縁の中で、絵手紙を介して幾度となく出会いと感動と転機に恵まれた。

ふっと言われて、ずっと落ちていく言葉たち。

いつかの悩ましかった自分を励まし、腑に落ちた瞬間の言葉が、どこかで逢い交わった誰かを励ます。

生まれてくる言葉は、これまでの軌跡の中で咀嚼させた、勝之さんの“ことば”だ。

「絵手紙と出会えてよかった。やっと、自分を表現できる手段を獲得した」。



自分の中から湧き出る言葉と絵から、自分を見つめ直せる。

いや、自分という存在が、見えるようになったのだ。

そんな自分が絵手紙を通して誰かと出会い、ほんの少し後押しをする。

これは、勝之さんの恩返しの方法。

「70歳をこの奥会津で迎えた自分ができることは、この土地でできることに挑戦して、イキイキとしていること」。

ブルーベリー栽培、ジャムの加工、燻製、カフェと農泊を受け入れながら、ふと浮かんだことを絵手紙に綴る…

「奥会津での健康的な生き方が、まさにこういうことだと思う。」

米と野菜を育て、炭焼きをして、馬そりで荷物運びをして、出稼ぎに出て、必要なものを拵える。

昔からこの地域では、食べるものと現金収入を求めて、季節ごとに仕事をいくつか持っているのが当たり前だった。

季節ごとの生業があり、その中から生まれてくるのが絵手紙だ。

それは、季節に揺らぎ、人に揺らぎ、変化に揺らぐ中で、刻々と漂う自分の姿。

ひとつのことに一所懸命になるから、見えることがある。

また、その力を分散してこそ見えてくる、多面的な自分がある。

勝之さんにとってのわっさとは、“趣味以上 仕事未満”。



「過去があって、今に辿り着いた。これからもそういう生き方をしていきたい。」